

<報告>

アメリカ・スラヴ学会 (AAASS) の ドヴァートフ

沼野 充義・守屋 愛

「日米合作」のパネルが成り立つまで

AAASSと略称されるAmerican Association for the Advancement of Slavic Studiesは、スラヴ研究の諸分野（政治、経済、歴史、文学、語学、芸術 etc.）をすべて糾合したアメリカ最大のスラヴ研究者の学会組織である（ちなみに、この略称は英語では普通「トリプル・エイ・ダブル・エス」と読まれる）。その規模の大きさと研究者の層の厚さはさすがに堂々たるもので、それに対応する日本の学会組織と比べると、残念ながら「大人と子供」くらいの歴然とした差がある。その差はもちろん量よりはむしろ質の問題なのだが、質についてここで簡単に云々することはできないので、一目でわかる量的な側面について言えば、AAASSの最新の学会員名簿はほとんど300ページに近く、会員数はざっと見積もって4000名といったところだろう。これは名前の通りアメリカ合衆国の学会だが、アメリカ国外に住む外国人であっても簡単に会員になれるというところが、いかにもアメリカ的な「オープンさ」で、ブラジルやリトアニアからロシア、日本に至るまで、世界各国の外国人会員の数も500名はくだらない（そのうち日本在住の日本人会員は現在26名）。最近の時勢を反映してか、旧ソ連・東欧圏の会員が増えている。

私は1981年から85年のアメリカ留学中に、この学会の年次総会（National Convention）に顔を出しては、その規模の大きさと質の高さに圧倒され、興奮するとともに、「いつか日本のスラヴ研究がこのレベルに達することがあるだろうか。いや、あるわけがない、研究者の勤勉さや研究環境を単純に比較するならば、差はつまるところか、日々水をあけられているのだから。勝負できるとすれば、研究者個々人の才能と感性の次元だけか」などと考えて、ちょっと暗い気持ちにもなったものだった。その後、留学を終えて日本に帰ってからも、会員の身分は保ち続けたのだが、一度ハワイで行われたコンヴェンション（1992年度）に半ば物見遊山に出かけて行っ

たくらいで、それ以外はこの学会とはほとんどつきあいがなかった。一つには、日本のスラヴ研究者の間で妙に「アメリカかぶれ」と見なされることを避けたいという気持ちがあり、また私自身の視線がペレストロイカ以後激変するロシア本国に向けられ、ロシアに頻繁に通ううちにアメリカからは興味が少し遠のいてしまったということもあった。

そんなわけで自分がAAASSのコンヴェンションの壇上に立つ機会が近い将来にあるだろう、などとはあまり考えていなかったのだが、1996年9月に東京大学で行われた国際シンポジウム「ロシアはどこへ行く？」に参加するために来日した批評家のアレクサンドル・ゲニスやコロンビア大学教授のキャサリン・タイマー・ニェポームニヤシチーと話しているうちに、ドヴラートフという作家との縁が色々重なっていることがわかり、それなら「日米合作」（というよりは、実質的には「日本およびアメリカ在住亡命ロシア合作」）でドヴラートフについての「パネル」をAAASSでやろうじゃないかという話になった。その時はその場かぎりの思いつき程度の話で終わるかとも思ったのだが、その後、ゲニスとニェポームニヤシチー両氏がこのアイデアを積極的に支えてくれたおかげで、何度かのEメールのやりとりを経て、ついにこのちょっと異例の「パネル」がシアトルのコンヴェンションで実現の運びになった。

この「パネル」の内容については、日本側のドヴラートフ研究者の代表として報告を行った守屋愛さんの以下の文章にゆずって、私としてはコメントを控えたいが、一つだけ補足しておけば、守屋さんの報告は日本の若手研究者のロシア文学理解の「筋のよさ」を示すものとして、ゲニス氏やニェポームニヤシチー教授に高く評価され、会場の参加者たちにもたいへんいい印象を与えた。またアレクサンドル・ゲニスとイヴァン・トルストイは学会の後、ロシア語国際放送局「ラジオ・リバティ」で、この「パネル」について紹介する番組を放送したという。

ここでは最後に、今回の学会で私個人として強く感じたことを2、3書きとめておきたい。一つは、現代文学をめぐってこのような学会でセッションが開けるということの意味。現代文学がアカデミックな研究対象となっているとは言いがたい日本ではこれはちょっと考えられないことで、それだけアメリカのスラヴ研究の対象領域の幅が広く多様であることを意味する。第2に、アメリカの学会でありながら、出席者の大部分が非アメリカ人であり、しかも英語ではなくロシア語によってすべての報告・討論が行われたこと。これはアメリカという国の懐の深さであり、やはり日本では考えにくいことだろう。他にも細かいことは色々あるのだが、全体として今回のアメリカは

新鮮だった。自分がこのところロシアにばかり行って、少々「ロシアほけ」していたのだろうか、「ロシアでは当たり前のこと」が「アメリカでは当たり前ではない」と改めて思い知らされるのは、気持ちいいことだった。いずれにせよ、ある外国のことを研究する場合、もう一つ別の国を視野に入れて文化の「3点測量」をするのは非常に重要なことである（研究対象がロシアのようにちょっと「当たり前でない」国の場合は特に）。アメリカのスラヴ学会との交流をもっと深める必要を痛感した。今回のドヴラートフ・パネルの成功に気を良くしたニエポームニヤシチー教授は、次のフロリダでのコンヴェンションではもっと日本から大学院生が参加して、若手研究者レベルの日米交流ができるような企画を考えよう、と提案している。それもなんとか実現するように、私としても努力したい。

(沼野充義)

Perspectives on Dovlatov

(AAASS第29回大会より)

1997年11月20-23日にアメリカ、シアトルにてAAASS (American Association for the Advancement of Slavic Studies)の第29回定例学会が開催された。本稿は、当学会で行われた、ドヴラートフに関するセッションの報告である。

AAASSは文学のみならず政治、経済、社会など、スラヴ諸国に関する人文社会系の学問をすべて扱っているため、非常に大きな組織である。学会もたいへん大がかりで、今回はシアトル・シェラトンホテルを会場にして四日間に渡って催された。セッションは二時間区切りで、同時に23のセッションがそれぞれの会場となる部屋で行われる。今回の学会で行われたセッションは362に及び、登録された司会者・報告者・コメンテーターは（複数のセッションに参加する者も含めて）1100人以上だった。しかし、これでも会場の都合で学会での開催を却下されたセッションが多かったという（シアトル学会でプログラム委員をなさっていらっしやったカリフォルニア大学サンタバーバラ校の長谷川毅教授談）。

この学会はアメリカのナショナル・コンヴェンションではあるのだが、アメリカ人と亡命ロシア人に、さらにロシアからのゲストたち（文学分野では、たとえば、モスクワ人文大学のドミートリー・バーク、『ズナーミャ』

副編集長で文芸評論家のナターリヤ・イヴァーノワなど)も加わって、非常にダイナミックで白熱した議論が交されていた。しかも、日本のロシア文学会では大学院生たち中心の発表であるのに対して、AAASSでは教授、助教授といった研究者たちの報告が中心である。(ちなみに、AAASSの下部組織といえる、語学・文学関係中心のAATSEEL (American Association of Teachers of Slavic and East European Languages)が毎年年末に行う定期大会では、大学院生による発表が多い。)率直に言って、第一日目にして私はその水準の高さと層の厚さに、ひどいカルチャーショックを受けてしまった。この衝撃を味わってみたい方は、今年(1998年)9月24-27日にフロリダで開催される次回のAAASS学会に行ってみてはどうだろうか。

政治、経済など他分野においては日本人による発表もしばしばみられるらしいが、文学の分野で日本から発表者が来ることはかなり稀らしい。特に、今回のドヴラートフに関するセッションでは、報告者三人中二人が日本人だったわけで、特異な試みだったといえる。しかし、アメリカ的視点とロシア的視点に、さらに第三者の視点加わることで、物の見方がより立体的になり、さらにお互いの研究における新しい発見や発展につながっていく可能性がかなりあるのではないだろうか。

さて、そのドヴラートフに関するセッションのメンバーと内容は、以下のとおりで行われた。

"Perspectives on Dovlatov"

November 20. 3:15-5:15p.m.

Chair: Lef Loseff, Dartmouth College

Papers: Mark Lipovetsky, Illinois Wesleyan U

"The Integrative Power of Absurdity: Paradoxes of Dovlatov's Poetics"

Ai Moriya, U of Tokyo

"The Art of Dovlatov: A Study of 'Ours' and 'Suitcase'"

Mitsuyoshi Numano, U of Tokyo

"Dovlatov's Place in Contemporary Literature: From the Viewpoint of a Japanese Slavist"

Discussant: Alexander A. Genis, Radio Liberty

AAASS学会では英語による報告・ディスカッションが大半だが、本セッションはロシア語を母国語とする出席者が多かったため、すべてロシア語で行われた。私が名前を知り得た限りでの主な聴講者は、ナターリヤ・イヴァーノワ、ドミートリー・バーク、コロンビア大学のキャサリン・ニポームニヤシチー、ヴァンダービルト大学のコンスタンチン・クスタノヴィチ、作家タチヤーナ・トルスタヤの弟でロシア亡命文学研究者のイヴァン・トルストイ（ラジオ・リバティ）といった顔触れだった。特に司会を務めたレフ・ローセフは、詩人としても高名な亡命ロシア文学者である。今思い出しても、このような錚々たる研究者たちの間で院生の身でありながら発表の機会を与えられたことは、非常に貴重な体験だった（非常におこがましかった気もするが）。

この貴重な体験を記録すべく、以下、順にマルク・リポヴェツキーの報告、アレクサンドル・ゲニスによるコメント、ディスカッションの様態をそれぞれ抄訳の形で紹介する。なお、沼野先生と筆者の報告は、別に発表時の原稿を原文のまま本号に掲載している。

（守屋 愛）

[抄訳] マルク・リポヴェツキー（イリノイ・ウェズリアン大学）

割れた鏡

— ドヴラートフにおける非反復の反復性 —

ドヴラートフが同じ物語、アネクドート、シーンを二回、三回、あるいは四回と再話して、かなり頻繁に繰返していることは、すでに前から指摘されている。この場合、論議されているのは、『手記』と短編小説との共通性ではなく、異なる連作作品間や一つの連作作品内の共通性である。

これらの繰返しには二つの特徴がある。第一には、繰返されるシチュエーションは大体、はっきりと伝記的な性格をもつ。第二には、これらの繰返しは決して一言一句同じではなく、繰返されるシチュエーションはかなり重大な変化を受けている。

たとえば、『わが家の人々』と『かばん』でドヴラートフと未来の妻エレナとの出会いは、全く違ったように描かれている。『わが家』ではレーナは冷静な女だが、『かばん』では知らない他人宅に入るやいなや、ドストエフスキーをソルジェニーツィンと熱狂して取り違えるような女性である。

これは繰返しだろうか？ 同一のモデルに関して複数の小説で語っているとするなら、トルストイにとって、トリーフォノフにとって、ソルジェニーツィンにとって、ペレーヴィンにとって、この種の繰返しはいかなる美的な意味ももたなかつただろう。モデルについての問題は、読者ではなく歴史家の領域である。

しかし、ドヴラートフにおいてはそうではない。ピョートル・ヴァイリとアレクサンドル・ゲニスらはドヴラートフの散文を「主人公と作者の間の境界が欠如している」と特徴づけているが、ドヴラートフにおける作者と主人公の一致はさまざまな問題を残している。自分自身の、もう過ぎ去った伝記の同一エピソードを繰返しながらも、ドヴラートフは自分の人生を新たに書き直して、たった一つの伝記を類似のバリエーションのスペクトルに変えていく。だがやはり、作者と主人公は同一ではない：作者はつねに現在にあり、主人公はいつも過去にいる。主人公は作者よりも何倍も自由であるが、その自由は結実しないことを作者は了解している。なぜなら、主人公の行為はすべて、結局、現在の作者、作者の今日の生活というたった一つの結果に行き着くのだから。

ドヴラートフの用いた場面やシチュエーションは、正確な時間的長さや、少なくとも地理的距離で区切られている。こういった叙事詩的距離によって、自分の運命や環境を叙事詩的な伝説として取り扱うことができる。叙事詩的な伝説の中では、もう嘘と真実は存在しない。どちらも対等なのだ。

繰返しは、叙事詩のスタイルには古典的手法である。繰返され、反復されることで、法則として存在は叙事詩的に理解されていく。このような法則としてドヴラートフの作品に現われるのが不条理である。つまり、法則の欠如こそ、実は法則なのだ。叙事文学は人間と天地を結び合わせる大規模な結び付きを前提とするが、不条理はいかなる結び付きもない、完全な支離滅裂さを特徴とする。それなのに、不条理が叙事文学の題材となりえるだろうか？ 叙事文学は創造するが、不条理は吹散らす。叙事文学は求心的だが、不条理は遠心的である。叙事文学は壮大さを志向するが、不条理は断片性やミニマリズムを志向する。

ドヴラートフの詩学のオリジナリティは、まさに、この不条理さと叙事性の撞着語法的結合の上に成り立っているのだろう。ドヴラートフ的反復は、この奇妙な結合をもっとも特徴的に具体化する。

プロットの反復だけではなく、構成の反復もドヴラートフの文体に特徴的である。彼の短編作品の多くは、構造的に同じタイプのエピソードの鎖のように作られている。こういったものは先が見えてしまって、退屈になるもの

だが、ドヴラートフの場合は違う。たとえば、連作『わが家』から二つの話を例として検討しよう。

ロマン・ステパノヴィチおじさんに関する話では、『健康な体には健全な魂が宿る』というおじさんの好きな格言が繰返され、これをテーマとする話のサイクルが繰返される。最後に作者が彼を精神病院に見舞うというエピソードがあるが、ここでおじさんのする不条理な忠告とその不条理な確信は、彼の肉体的健康という強調されてきた特徴と結合している。

話の中の構造的反復は漸層法の原則でなされる。健康、つまり正常さ、秩序あること、存在の正しさには、第一には愚鈍さがふさわしく、第二にはあからさまで攻撃的な傾向をもった狂気がふさわしい。これこそが、繰返しによって明らかになる『存在の法則』である。

ドヴラートフ的構成のパラドックスは、繰返されないものを繰返すところにある。愚鈍／狂気と健康／常軌の組み合わせは、毎回、予見できない、新しい、それだからこそ滑稽な結果をもたらす。不条理さの原理には、数え切れないほどたくさんの様々なプロットを作り出す力がある。

非反復の反復という原理に基づく類似の構成は、ドヴラートフの有名な小説の大部分に見られる。もちろん、これがドヴラートフ的構成の唯一の手法というわけではないが、全体として彼の詩学に非常に特徴的である。

ある意味で、ドヴラートフの不条理に対する見方は、やはり幾度もの構成上の反復で作られた（『わが家』の第九章）『いとこのポーリャ』の話の中で明らかにされている。この話では少なくとも六回、同一プロットの構成が繰返される。毎回、いとこのボリスは並外れた成功をさっと手にいれたかと思うと、なにか無意味な犯罪行為をしでかしてしまう。

ボリスは才能ある順応主義者である。しかも、自分が状況に順応するのではなく、あらゆる状況を自分に有利にもっていくことができる。ソビエト的状況での順応はつまるところ、権力へと導かれるものだが、ボリスの才能の豊かさには、予見不能の爆発性の（不条理な）効果があり、それゆえ、いとこは反理性的な不可思議な行動に突き動かされる。また、そういった際の、いとこの不条理な振る舞いには、いつも物事の本質をむき出しにするという面白い効果がある。

この話で繰返しは一体どんな役割を演じているだろうか？ 反復はやはり、不条理を法則に変えるが、そのやり方はロマン・ステパノヴィチおじさんの話とは少し異なる。ここでは、不条理な行為の反復それ自体が、それらの必然性や必須性を強調する。囚人が飛んで逃げたという話が、いとこの不条理な振る舞いに対置される。また、いとこの話はドヴラートフ自身の話を

通して、その二人を対位して進む。

本質的に、作者の『他存』となるのはドヴラートフの叙情的主人公だけではない。ドヴラートフのその他の登場人物全員がその役割をもって登場している。なぜか？ なぜなら、かれらの人生は同様に『マイクロナンセンス』（ビクトル・トポロフの用語）によってできているからだ。ドヴラートフの散文はいずれも、細かい破片がばらばらになった、割れた鏡を彷彿させる。それに、それを叩き割った人間である作者が覗き込んでいる。彼の顔はいくつも見えるが、それらには互いに似ているものもあれば、似ていないものもある。不条理は、その分解、完全性の分解、目的論の分解、将来性の分解の印である。しかし、ドヴラートフは不条理主義者の分解を共通の『土壌と運命』に具体化した。全員が作者に似て、作者は全員に似ている。なぜなら、作者をふくめて皆、不条理に生きているからだ。

ドヴラートフの不条理は、明らかにポストモダンの特徴をもつ。不条理は同時に、ユニークで普遍的であり、反復性と非反復性を調和させる。不条理のおかげで、ドヴラートフの叙事詩的世界は叙情的価値にあふれ、またその逆も言える。つまるところ、ドヴラートフにおける不条理は秩序の基礎なのだ。ドヴラートフの不条理によって世界は理解可能になるのではなく、世界は明瞭になる。おそらく、これこそ、ドヴラートフの詩学の最も驚くべきパラドックスだろう。

[抄訳] アレクサンドル・ゲニス (ラジオ・リバティ)

報告に対する論評

三つの発表はいずれも非常に有益で、すでに文学規範に入った作家としてのドヴラートフ研究のテーマの発見を可能にするものだろう。

マルク・リポヴェツキーの報告でとりわけ興味深かったのは、ドヴラートフにおける叙事文学と不条理という中心的対立である。私ならば、この場合、もっと一般的な対立、カオスと秩序と言うところだ。その方が正しく、忠実だろう。というのも、これこそドヴラートフの作品の主要テーマなのだから。では、ドヴラートフはどちら側にいたのか？ 彼自身確信していたことだが、彼は世界でなによりも秩序に価値を置いていた。ただ、彼ほど秩序を乱した奴はいないということも言うておかなければならないだろうが。マルクの言う叙事文学と不条理という、カオスと秩序の間の緊張関係の破壊、これこそが、ドヴラートフの散文にみられるものなのだ。だから、この対立に

基づく一連の比較検討は効果的で、さらに詳しい研究が可能だろう。

リポヴェツキーが用いた『マイクロナンセンス』という用語について、一つ疑問が浮かんだ。どういうふうにこれが定義されるのかは知らないが、私にはこれ自体がナンセンスに思える。というのは、不条理とは尺度の外にあるものだからだ。不条理にはミクロもマイクロもありえない。だからこそ、それがどんなに秩序を破壊し乱すものであっても、ドヴラートフにはそれほど重要だったのだ。不条理とは、カオスのワクチンである。ドヴラートフは、話に不条理を注射することで、自分の世界観から自分の芸術世界全体を作り出している。

我々の日本の同僚たちの報告は、異文化におけるロシア文学研究を教えてください。私自身、続く二人の報告者（守屋、沼野）が示してくれた日本的パースペクティヴのおかげで、興味深いことや新しいことを非常に多く知った。

守屋愛の報告で、とくに意義深かったのはバーベリとの興味深い比較だろう。私の知る限りではバーベリとの比較は初めてなされたことではないかと思う。これについては、なお一層の研究価値があるだろう。

また、守屋が日本でのドヴラートフに対する態度について述べたことも興味深い。とりわけ、日本文学もしくは日本文化全体にある『言葉で言い尽くさない美学』とドヴラートフの簡潔さの間の相関関係は面白い。私の知る限りでは、ドヴラートフは東洋に全く興味をもっていなかったが、それでも、ヘミングウェイの路線に近いのと同じように、ドヴラートフの文学は東洋の路線にも非常に近いと私はいつも思っていた。だから、この共通性、つまり、守屋の作り出した《ドヴラートフーヘミングウェイー日本》という三角形は非常に興味深い。

不正確な点を指摘すると、守屋は「作品のなかでドヴラートフは常にセルゲイとして、妻はいつもエレナとして登場する」と述べているが、彼の作品には自分をボリス、妻をターニャと設定しているものもある。

沼野充義の発表も非常に興味深いものだった。たしかに、彼の分類は、作品分析にとって非常に便利な道具であり、聞き手の理解を手助けしてくれるもので、余すところなくドヴラートフの詩学を説明している。沼野は、ドヴラートフを他の作家たちに近づけるのではなく、ドヴラートフを際立たせているものに考えを集中させている。

もう一つ、気がついた点は無思想性についてである。沼野の意見では、「人は思想無くしては生きられない。それゆえ、ドヴラートフにとっての無思想性は文学的手法であって現実の基本方針ではない」ということだが、私

ならばこうは言わないだろう。長年彼とつきあってきた私には、無思想性がドヴラートフの原則だったように思われる。

最後に述べておきたいのは、ロシア文学に対立するべきドヴラートフの七つの特徴はすべて、ロシア文学をそのパロディーとして理解する場合にのみ対立するということだ。つまり、我々が数え上げたこれらの特徴はすべて、ロシア文学に固有のものにはほかならなかったのだ。かけ離れていると思われる作家たちにも、これらの特徴を見い出すことができる。たとえば、チェーホフは言うに及ばず、ドストエフスキーにも。

実際、ロシア文学はより広く、より奥深い。だから、ドヴラートフはロシア文学の伝統に逆らっていても、なおロシア文学の一員とされている。伝統という理解のより深いところで、ロシア文学の一員なのだ。ドヴラートフは、当初アメリカの散文を模倣したが、晩年にはもっぱらロシア文学を読み、プーシキンやゴーゴリの中に自分の先駆を探っていた。つまり、彼は伝統を破ったのではなく、引き継いだのだ。

[抄訳] セッション出席者によるディスカッション

ドヴラートフはロシア的か、非ロシア的か^{注1}

レフ・ローセフ：

ドヴラートフをあまりにも非伝統的だと理解するべきではない、といった幾つかの意見をまとめてみたいと思う。やはりドヴラートフはロシア文学における短編小説の確固たる伝統の終わりにある。私は、ドヴラートフが自分自身をクプリーンと比較していたことを思い出す。クプリーンは彼にとって模範だった。もっとも、私としてはドヴラートフは美学的にシャラーモフに非常に近いと思う。ドヴラートフの美学の第一のカテゴリーとして簡潔性や凝縮性が挙げられたとき、とっさに思い出したのは、青春時代に上手に書くことをいかに学ぶべきか思案したというシャラーモフの話である。彼はバーベリの短編（題名はわからないが）を取り上げて、そこから学べると考え

^{注1} 三人の発表者による報告とゲニスによるコメントの後、ディスカッションは約40分間に渡って行われた。日本におけるドヴラートフ理解についてや、ドヴラートフの詩作の試みについてなど、議論はさまざまなテーマに及んだが、ここではもっとも活発に論議されたテーマ：「ドヴラートフはロシア文学において伝統的な存在か、それとも非伝統的な存在なのか」を中心にまとめてみた。この問題は、とくに日本側の報告者に対するロシア人出席者側の反論として持ち上がったという点で、非常に興味深い。

た。

確かに、これらの七つの分類はドヴラートフの創作の特徴をほとんど言い尽くしているが、私にはもう一つ、ドヴラートフにおいて非常に本質的なものがここに抜け落ちている気がした。それをうまい言葉にすることができないのだが、ドヴラートフの無思想性、もっと正確に言うと、アンチイデオロギー性に関して沼野氏が挙げた例と関連している。それは、新聞の編集部で起った火事のアネクドートの例だが、そこでドヴラートフとアメリカの警官との間に交された台詞はいかにも現実的に描かれているが、実際にアメリカの警官がそのようなことを尋ねるはずはない。つまり、ドヴラートフの詩学には、見せかけのリアリズムの効果が重要な要素となっている。

グリゴリー・クルシコフ（コロンビア大学）^{註2}：

ドヴラートフの伝統に関して、非常に月並なことかもしれないが、私は大きい文学のチェーホフやバーベリの伝統の他に、そこに大変優れた作家たちを輩出してきたソビエト児童文学の伝統を見ている。ドヴラートフにもなんらかの影響があると思う。たとえば、ユーリー・コヴァーリの名前を挙げることができる。

ナターリヤ・イヴァーノワ：

ドヴラートフが出てきた伝統の話が続けたいと思う。児童文学に関する意見はたいへん興味深い。雑誌『カスチョール』の伝統もそのなかに入れて考えたい。ペテルブルグ出身の作家の多くに特徴的だったことだが、かれらは児童文学を経てロシア文学に入ってきた。児童文学の短い短編小説やボリス・ジトコフを経て、ロシア文学に入ることができた。

今日、私たちはチェーホフに関して云々してきたが、凝縮性や簡潔性や、無思想性と名付けられたものなどからプーシキンの伝統ともつながりを見い出せる。たとえば、『スペードの女王』が思い出されるが、これは、今日議論された特徴の多くにとって、非常に新鮮な作品である。おそらく、ドヴラートフにはプーシキンのドヴラートフというテーマが存在する。

コンスタンチン・クスタノヴィチ：

つまり、結局、ドヴラートフはロシア文学全体の伝統を受け継いでいるわけだ。しかし、ここに私が長年研究している人の名前もぜひ加えておきた

^{註2} グリゴリー・クルシコフはアフマートワの研究者として知られているが、彼自身児童作家でもある。1995年出版社『グラス』から、ちょっとシュールなおとぎ話《Откуда что взялось》を英語対訳付の絵本で出版している。

い。それは、ヴァシーリー・アクショーフで、78年の『ノーヴィイ・ミール』に掲載された、彼の小説『ジャンルの探究』のなかの挿話がもっとここにふさわしいだろう。ドヴラートフにみられる傾向やイントネーションやアイロニー、登場人物の特徴の正確な描写など非常に似通っている。かれらはジャンルを探究していたのだ。

アレクサンドル・ゲニス：

トルストイについて言えば、ロシア文学の最良の作品はトルストイの中編小説『主人と下男』だ、と私は幾度もドヴラートフから聞いた。ドヴラートフはこの作品の熱心な支持者だった。60ページほどの作品だが、彼は数カ所を誦じてみせるほどで、ロシア文学の偉大な作品とみなしていた。

一方、ソルジェニーツィンについては言うと、ドヴラートフとソルジェニーツィンはよく対立させて考えられているが、それはアメリカの出版者たちから始まった。ドヴラートフの主人公もソルジェニーツィンの主人公も同じ地獄にいるけれど、ドヴラートフの方が陽気だ、というわけだ。実際、ドヴラートフとソルジェニーツィンとシャラーモフは三人ともラーゲリのことを書いていたし、ドヴラートフとシャラーモフは知り合いで、互いに論争などしていた。が、私としてはドヴラートフはシャラーモフよりソルジェニーツィンに近いと思う。というのは、ドヴラートフはソルジェニーツィンと全く同じこと：「ラーゲリが私を作家にした」という言葉を言っていたからだ。

ちなみに、ドヴラートフは自分の本が出る度に、プレゼントとしてソルジェニーツィンにそれを贈っていた。返事をもらったことは一度もなかったのに。けれど、最近聞いた話によると、ソルジェニーツィンはドヴラートフ選集（全三巻）の第一巻と第二巻をすでに読んだということだ。

沼野充義：

私の報告に関するコメントに答えて。ドヴラートフの詩学はロシア的詩学とは伝統的にあまり合致していない、ということを経験した。今日の報告では、ひょっとすると、挑発的に強調してしまったかもしれない。しかし、私の報告ではむしろ、ロシアではなく外国でつくられた、月並な一般的なロシア文学のイメージとの不一致について議論している。したがって、ドヴラートフはロシア文学の影響を奥底では受け継いでいるのだ、という意見の方々に賛同することができる。おそらく、基本的には我々の互いの立場に重大な対立はないだろう。

(抄訳：守屋 愛)